Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

令和6年度企画展示連動企画
"なんで!?" みんなのアイデア紹介……2

調査員の研究ノート
調査研究員 藤丸亮介……4

今月の逸品 Returns!!……6

遺跡だより
練馬区 大泉中里遺跡……8

東京都埋蔵文化財センター報 139

令和6年度
企画展示連動企画

“なんで!?”みんなのアイデア紹介！

こんにちは！ボクはナンデくん！
ただいま開催中の令和6年度企画展示
「多摩の“なんで!?”な出土品」の案内係だよ。

多摩の出土品には“なんで!?”がいっぱい。
このコーナーではみんなから集まった
“なんで!?”のアイデアを紹介するよ！

ナンデくん
多摩丘陵出身。約 5,000 年間土の下で眠っている間に、縄文時代のことも、自分がなんでバンザイしているのかも忘れちゃった！
みんなも一緒に考えて～！ 現在、展示室にて展示中。
自分も「勝坂式」土器の一部として、土器の文様に興味津々だよ。

◆ヘビのような文様

「勝坂式」土器によく付いている

もうすぐ新年。来年の干支は巳ということで、巷にはヘビのグッズが溢れているね。実は、縄文土器の文様にもヘビのようだと言われているものがあるよ。今年度の企画展示でも「いきものを表現するのはなんで!?」というテーマで取り上げているんだ。

ヘビのような文様は、縄文時代中期（約5,000年前）に関東西部から中部地方にかけて多く見つかるよ。関東地方では「勝坂式」土器と呼ばれている一群さ。

本当にヘビかな？

写真１、２、３に挙げた「勝坂式」土器の文様はみんな違う形をしているけれど、これらがヘビと言われているものの例だよ。確かに、写真１はヘビの頭にも見えるし、写真２のニョロっと長いところはヘビにも見えるね。でも、写真１ではヘビ（？）の頭の上にトサカのようなものがあるし、写真２はボクの手のようにも見える（ボクも「勝坂式」の文様だよ）。写真３に至っては、頭の上にヘビ（？）が乗っているようにも見えるね。これって本当にヘビなのかなあ？髪型のようにも見えるかも？まずはそこから疑ってみる必要もあるかもしれないね。

研究者の間でも、人によって意見はさまざまで、ヘビと考える人もいれば、空想のいきものと考える人、いきもの以外の可能性を指摘する人もいるよ。

写真１　土器のフチにヘビ（？）

写真２　常設展示の土器にもヘビ（？）

写真３　頭の上にヘビ（？）

◆いきものを表現するのはなんで!?

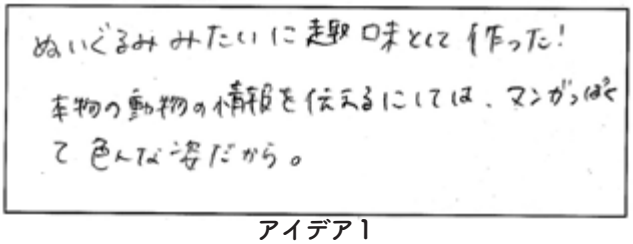
ただ、もしこれらがヘビだとしたら、「なんで!?」土器に表現されたのかも気になるところ。ここからは「いきものを表現するのはなんで!?」に対するみんなのアイデアを紹介するよ。

みんなのアイデア

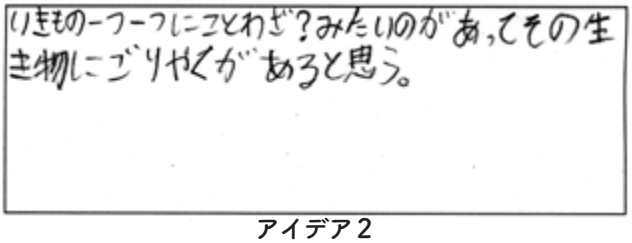
一番多く寄せられているのは、「かわいいから」「趣味として」「芸術として」作ったという意見だよ。中にはその根拠として、デフォルメされた造形は本物の情報を伝えるのには不向きだろう、という鋭い指摘をしてくれた人も（アイデア１）。そうなると、現代にも「ハトは平和の象徴」というような考え方があるように、縄文時代にもいきものをなにかの象徴として表現することがあったのかもしれないね。これに関連して、「いきもののご利益にあずかろうとした」（アイデア２）とか、「守ってもらおうとした」という意見の人も多かったよ。

縄文土器は煮炊きの道具なので、「煮る動物によって土器を変えていたのではないか」という意見を出してくれた人もいたよ（アイデア３）。ヘビのような文様の土器では、なにを煮ていたんだろうね？また、エサ入れなど、その動物のために使う容器だったのではないかという意見もあったよ（アイデア４）。ただ、縄文人がエサをあげていた可能性のある動物にはイヌやイノシシがいるけど、イヌのような文様の土器は見たことないなあ。「有孔鍔付土器（ゆうこうつばつき）」と呼ばれる特殊な土器には、よくカエルのような文様が付くことなどから、これをカエルの飼育容器と考える説もあるけど、今のところ土器の中でなにかを飼っていた痕跡も見つかっていないしなあ。

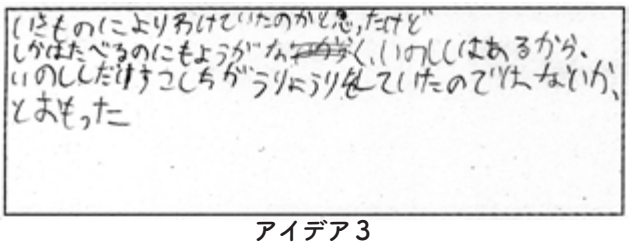
実はボクの描かれている土器の背面にも「ニョキ！」っとしたなにかがいて、ずっと気になってるんだ……。これもヘビだとしたら、ボクは襲われるところ？それとも友だちなのかな？ぜひみんなの考えも教えてね！　（ナンデくん／訳：宮本　由子）



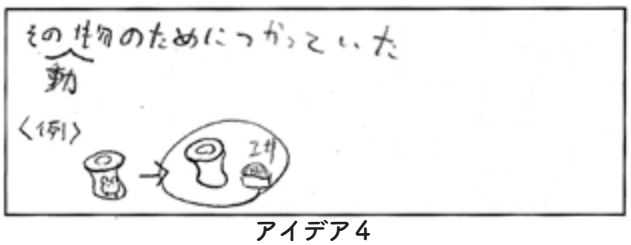
アイデア１



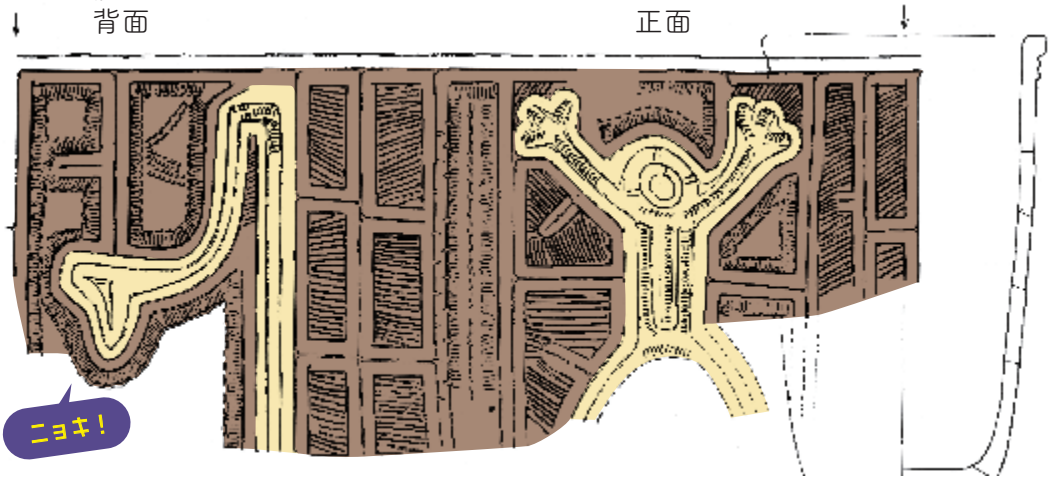
アイデア２



アイデア３



アイデア４



ナンデくんの反対側にいる「ニョキ！」っとしたなにか

調査員の研究ノート

こんな研究しています

当センターの調査研究員が
行っている さまざまな研究を
やさしく紹介するコーナーです。

#6　調査研究員　藤丸 亮介

はじめに

私は東京の地形と古墳の立地関係に関心を持っています。古墳の立地条件は、築造に携わった当時の人々の活動や、その立地を選択した当時の環境などについて考察する上で、重要であるからです。

デジタル情報で見る地形

現在の東京では、古くから続く開発により、多くの古墳が地盤ごと削平・改変を受けています。特に台地部と低地部では密集する建物群で地形を直接観察出来る場所が限られています。そこで、地形の変化を掴む際は地図だけではなく、国土地理院や産総研地質調査総合センターなどのホームページで公開されているデータを利用することで、地形を 3D 的に復元する方法も使うことがあります。

上記のホームページでは、地形や地質など土地の属性に関する様々なデータが公開されているので、必要な情報を組み合わせた地図を作り比較・分析・検討も行えるようになってきています。図１・２は特定地域の地形変化を立体化したもので、図３は標高を色別で表示したものと一部断面図です。縮尺などが任意に変えられるので、台地の高低差や、低地のような起伏の僅かな場所でも地形変化を視覚的に強調することが出来ます。地上の地形変化に遺跡調査によって得られた実際の遺跡（地下）等の情報も加えることによって、見えてくるものがないかと試行錯誤しているところです。

東京都の地形と古墳の立地

東京都の地形は、大まかに西側が関東山地、中央部が武蔵（むさし）野台地、東側が東京低地となっており、山地と台地の中に河川の浸食によって出来た低地部が存在します。文化庁のホームページで公開されている「周知の埋蔵文化財」によると、令和３年度時点で東京都の古墳は 814 基が「確認・現存」となっています。主要な古墳の立地を見てみると、多摩（たま）川流域、多摩川の上流にあたる西方の丘陵地帯にも分布していますが、分布域は台地と低地の境にあたる台地上の縁辺に多い傾向があります（図４）。こうした場所に古墳が集中する背景にはいくつかの要因が考えられます。古墳はいわゆる「お墓」ですが、規模が大きいため、その築造には多くの人手と石材

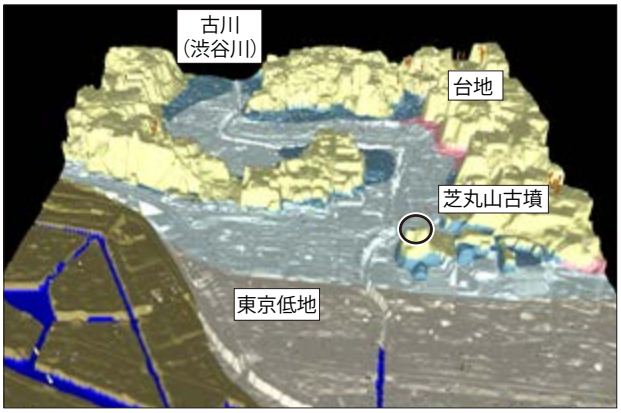


図１　芝丸山古墳の位置と周辺の地形

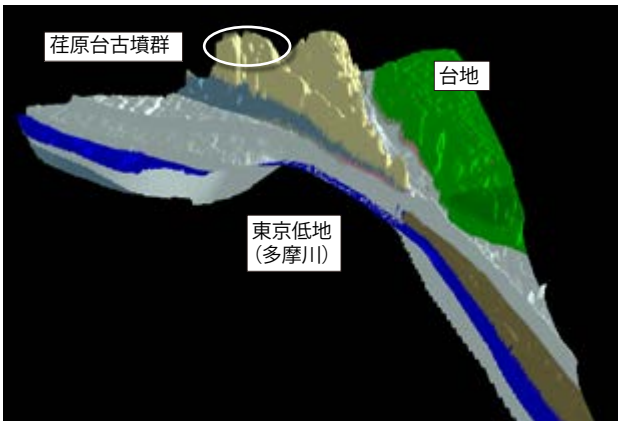


図２　荏原台古墳群の位置と周辺の地形
（図２・３は地質調査総合センターの HP で立体図を作成）

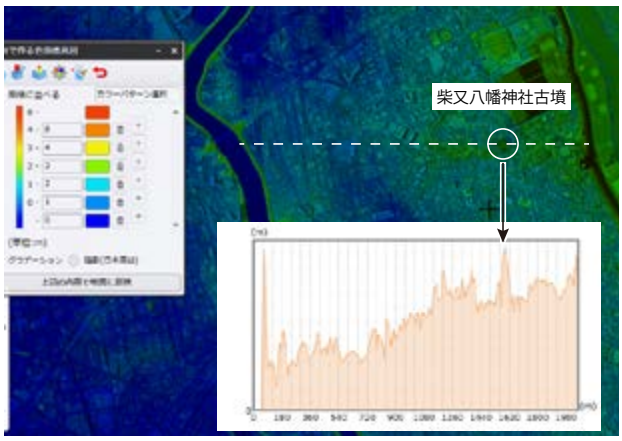


図３　柴又八幡神社古墳周辺の地形
（国土地理院の断面図から作成）

など重量のある資材の運搬が必要となります。当時、重量物の主な運搬は舟でした。そこで、生活に必要な水場が近くにあり、運搬に水上交通が利用しやすい環境である必要がありました。更に、地盤が頑丈でありつつも、ある程度人力で掘削がしやすいといった条件も満たす必要があったと思われます。これに適していた土地が台地の縁であったのでしょう。集落と古墳の位置関係に目を向けると、低地には荒川や多摩川などの大河川がもたらす肥沃な土壌が形成されているので、主に稲作を行うのに適しています。台地上は生活には不便なように見えますが、台地内には湧水や小河川で形成された小谷地形が多く存在していたことが判明しているので、水源として利用されていたことでしょう。台地上では台地縁辺や小谷の付近から多くの弥生時代・古墳時代の集落跡が発見されていますが、古墳が立地するのはこうした場所からやや離れた、台地の縁辺や低地への変化点であることが多く、弥生時代の方形周溝墓の分布域とも近いことから、集団の生活基盤に影響が少ない場所が選ばれていたとも考えられます。

台地縁辺の古墳には、港区芝丸山古墳（５世紀前半、図４の①）や大田区荏原台古墳群（６世紀前半～７世紀中頃、図４の②）などがあり、周囲の低地との比高差が約 10 ～ 15m の場所に立地します。近くからでも見上げる程の高さの墳丘を持つ古墳ですが、建物などの遮蔽物が無く、低地側や谷や川を挟んだ台地から臨むことができた頃は、より存在感があったことでしょう。このように海や川を見下ろすような場所に立地している古墳は、その地域における生活基盤となる土地を治める有力者の威容を示すモニュメントとも考えられています。（図１・2）

一方で低地部の古墳には、葛飾区柴又八幡神社古墳（６世紀末～７世紀、図４の③）、足立区白旗塚古墳（図４の④）など、低地の微高地上に築かれた古墳も確認されています。葛飾区には御殿山遺跡・上小岩遺跡、足立区には伊興遺跡といった集落遺跡が存在しており、江戸川や東京湾の海上交通に関わる拠点を治めていた有力者のために築かれた可能性もあります。台地上の古墳との差は立地以外にもあり、柴又八幡神社古墳から出土した埴輪は「下総型埴輪」、石室の石材は「房州石」（千葉県鋸山周辺から産出）と、低地東側の下総（現在の千葉県北西部）地域との関連性がうかがわれます。足立区の古墳から出土した埴輪には低地西側の武蔵野台地の特徴があるなどの要素を考慮すると、葛飾区域は千葉県北西部の下総台地に、足立区域は武蔵野台地というように、それぞれの地域で台地上の集団との結びつきに違いがあり、それが古墳にも反映されている可能性があります。立地の関係からこのような関連性を捉えることができると考えています。

図４　東京の地形区分図（東京湾埋立地を除く）

今月の逸品 2024年 Returns!!

当センター体験コーナーの一角にある「今月の逸品」コーナー。当館収蔵品や現在調査中の遺跡出土品の中から、選りすぐりの逸品を（ほぼ）月ごとに展示しています。ここでは2024年にどんな「逸品」たちがお目見えしたのか、いくつか振り返ってご紹介します。

Vol.98「翠玉オールスターズ見参!」

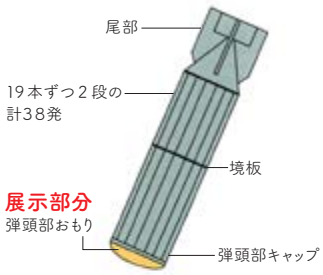
ヒスイ大珠・垂飾・未製品
（多摩ニュータウンNo.72遺跡他、縄文時代中期）

年のはじめはやはり特別、ということで新年最初は当館収蔵品のなかでもわかりやすく豪華な逸品を展示しました。集まったのは縄文時代の翡翠製の装飾品や未製品10点。翡翠といえば現在でも高値で取引されている宝石ですから、土器や石器など一見地味な展示品が多くなりがちな当館のような考古学系展示施設では、いわばスターと行って良い逸材です。もちろん使われている素材の価値で遺物の価値が決まるわけではなく、新潟・富山県境付近でしか出土しない翡翠は、縄文時代の地域間交流を雄弁に物語る貴重な研究対象。これまでも当館では繰り返し展示してきましたが、この回は多摩ニュータウン出土の翡翠全点を一堂に集めたのがウリでした。

Vol.99「掘り出された『恐怖の大王』」

集束焼夷弾E46ノーズブロック
（豊島区長崎一丁目周辺遺跡、1945年4月12-13日）

いかにもおめでたそうな翡翠から一転、2024年度第二弾展示は禍々しいものとなりました。第二次大戦末期、木造家屋主体の日本の街はB29戦略爆撃機から投下される焼夷弾によって大打撃を受けました。展示したのはE46集束焼夷弾の先端に取り付けられた錘部分で、豊島区の長崎一丁目から出土したもの。城北地域を焼き尽くした1945年4月12、13日の空襲で投下されたものと考えられます。E46はいわゆるクラスター弾で、内部に納められた38個もの子弾を上空約600-700m付近から広範囲にばらまく構造になっています。人によっては目を背けたくなるかもしれませんが、世界各地で戦禍が続く今だからこそ見ていただく意味もあるかと思います。



1発の親弾から38発のM69が約700m上空でばらまかれる

東京大空襲・戦災資料センター編2022「東京大空襲・戦災資料センター図録『いのちと平和のバトンを』」を元に作図・改変

Vol.100「もう一人のナンデくん」

縄文土器 深鉢
（多摩ニュータウンNo.46遺跡、縄文時代中期）

3月から始まった2024年度の企画展「多摩の“なんで!?”な出土品」で案内役を努め

てくれている「ナンデくん」。土器の人体装飾文から飛び出したキャラクターですが、「逸品」で展示したのは同じ遺跡から出土して、そっくりな模様のつく、いわば兄弟分の土器です。よく似た二人（？）ですが、「バンザイ」ポーズの「ナンデくん」に対し、この彼(?)は「ファイト!」ポーズ、さらに腕の先もくるっと丸まっているなど、微妙な違いも。割れ口を結び合わせて補修した痕跡もあり、さらに最後は下半分を打ち欠いて住居の炉(ろ)の囲いとして再利用されていました。来館者のみなさまにも大人気の「ナンデくん」ですが、兄弟分の彼も縄文人に長く愛された人気者だったようです。

Vol.103「ツートンカラーは『なんで!?』」

甕（多摩ニュータウン No.339 遺跡、古墳時代）

本年度の企画展示にちなんで、今年は思わず「なんで!?」といいたくなるような遺物たちを多く展示しました。Vol.103 は古墳時代の甕(かめ)ですが、不思議な点は上下が赤、真ん中が白と、くっきりと色が分かれていることです。この土器は上中下のそれぞれの部分を別に作った後につなぎ合わせる分割整形という技法によって作られているのですが、部分ごとの土の成分の微妙な違いが、焼き上げた後に色調の違いとして現れたと考えられます。全体のつくりの粗さを見ると、意図したデザインというより偶然の産物のようですが、なかなか個性的で魅力ある逸品と言えるのではないでしょうか？

Vol.105「You はどうして集落へ？」

宇瓦（軒平瓦）（武蔵台遺跡、奈良時代）

最後に紹介するのは、本年度の文化財ウィーク特別展示と連携した逸品。当館では、毎年文化の日前後に開催される東京文化財ウィークに合わせて、都指定有形文化財や重要文化財を公開する特別展示を行っています。本年度に取り上げたのは奈良時代の瓦。稲城市大丸の多摩ニュータウン No.513 遺跡で焼かれていたものです。操業時期の終わりごろの No.513 遺跡では、創建期の武蔵国分寺向けの瓦生産が行われていたのですが、「逸品」で展示した瓦は国分寺に隣接する集落から出土したもの。No.513 遺跡で生産されていたのと同じ三重弧文が施された軒平瓦ですが、問題なのはその年代です。三重弧文のデザインからは、武蔵国分寺(むさしこくぶんじ)創建時に利用されたものと思われるのですが、出土したのは 100 年以上も後の竪穴(たてあな)住居。カマドの芯材として使われていたようですが、100 年も前の瓦をなぜ使ったのか、現時点で結論は出せないものの、集落と国分寺の関係を解き明かす鍵となる興味深い遺物として展示しました。

2024 年の逸品たち、いかがだったでしょうか？当館の収蔵庫や各発掘現場には、興味深い遺物がまだまだ眠っています。来年もそんな逸品たちを続々紹介していきますので、お楽しみに。それでは皆様よいお年を！　（舟木　太郎）

遺跡だより 142

練馬区　大泉中里遺跡

所在地　：　練馬区大泉町二丁目
調査期間：　2024 年 3 月～ 10 月
調査面積：　1,764 ㎡

練馬区大泉中里遺跡（練馬区 No.17 遺跡）は、練馬区北西部の大泉町二丁目に所在し、白子川中流域の右岸崖線上に立地する遺跡です。今回の調査は、補助第 230 号線（大泉町）道路整備に伴うもので、平成 31 年２月から令和元年 11 月にかけて当センターが実施した調査（第四次調査）に続く第五次調査にあたります。今回の調査では、これまでの調査成果と同様に、旧石器時代の遺物集中、縄文時代早期後半の竪穴住居跡の可能性のある遺構、炉穴、縄文時代中期後半の集石、土坑、ピットなどのほか、近世以降の畝間溝等の農事関連遺構が検出されました。

旧石器時代では、関東ローム層のⅣ層下部からⅤ層上部から、多量の焼けた礫のほか、黒曜石の角錐状石器（写真１左）や黒色頁岩のナイフ形石器・剥片が出土しました。３ヶ所の遺物集中（写真１右）は全て標高の高い北西側に集中しており、これは第四次調査と同様の傾向です。

縄文時代早期後半の炉穴（写真２）は、複数基が隣接または切り合った状態で検出されました。炉穴からは、縄文時代早期後半の土器である貝殻条痕文土器が出土しています。そのほかに、竪穴住居跡の可能性のある遺構も複数検出されていますが、明確な床面は確認できませんでした。

縄文時代中期後半の集石（写真３）は、多量の焼けた礫とともに、加曽利 E3 から E4 式の土器片が出土しました。礫の広がりを見ると、中心は１箇所だけではなく、いくつかの集石が集まっていることが推測されます。

近世以降の農事関連遺構としては、畑の畝の両脇に位置する畝間溝が検出されました。さらにその下層では、関東ローム層の地山を溝状に掘削して黒色土に入れ替えた痕跡がいくつも確認されました。酸性土壌であるローム層は畑作に向かないため、畑作に適した土壌改良がおこなわれたと考えられます（写真４）。

現在進めている二次整理作業で、調査の詳細な成果を明らかにしていきます。　（守屋　亮）

写真１　旧石器時代の角錐状石器と遺物集中（東から）

写真２　縄文時代早期の炉穴（南西から）

写真３　縄文時代中期の集石（南西から）

写真４　近世以降の農事関連遺構（西から）

※今号の表紙：蛇体把手土器各種（多摩ニュータウンNo. 46 遺跡、No. 67 遺跡、No. 72 遺跡）

たまのよこやま 139　　2024 年 12 月 19 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　https://www.tomaibun.jp/